

# On the Typology of Relative Clauses

Masayoshi Shibatani  
Rice University

主部名詞句の有無、およびその位置をパラメータとした関係節構造の類型分類を基盤に、いくつかのタイプの連体修飾構造が世界の言語について観察されてきた。日本語や英語の観点からすると特に珍しいものとして、無主部関係節

(Headless relatives)、主部内在関係節(Head-internal relatives)などが多くの言語において認められてきたが、S-Y. Kuroda・黒田成幸氏によると、日本語にはこれらに加えて左方主部関係節 (Left-headed relatives) も見られるという。左方主部関係節と呼ばれる現象については、国語学の伝統的な研究においても議論されてきたが、近年近藤泰弘氏などは黒田氏の観察と平行的な観点から日本語の連体修飾構造を説いている。本論では、日本語の連体修飾構造をはじめ他の言語でいわれる関係節構造についての従来の研究における根本的な誤りを指摘し、これらの現象の中核となるものは、体言化 (Nominalization) であると説く。いわゆる無主部関係節は、体言化形式に他ならないという主張を皮切りに、Kuroda・黒田のいう左方主部関係節ならびに主部内在関係節はともに体言化形式を基盤とした現象で、関係節とは認めがたいと論じ、さらには関係節構造一般についての新しい見解を提示する。その帰結として、Keenan-Comrie の NP Accessibility Hierarchy による類型論的研究はその基盤を失うこととなる。通言語資料とともに、幼児による連体修飾構造の習得パターンならびにその過程に見られる誤用 (「赤いのくつ」) などを傍証としながら論を進める。